

2010年7月9日

愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会 御中

西澤泰彦

(DOCOMOMO Japan 委員/名古屋大学准教授)

前略 今回は日程調整の結果、小生は欠席となりますので、事前にいただいた資料について、書面で意見表明と質問をさせていただきます。

会議終了後、結果について、書面で返事をいただければ幸甚に存じます。

## I 資料「愛知県立芸術大学キャンパス整備の経緯」について

### 1. 法人マスタープラン「1 作成主旨」について

県立芸術大学（以下「芸術大学」という。）は、開学後40年を経過し施設の老朽化が著しく、日常の教育研究活動にも支障をきたし、学生の安全確保が難しく改修・改築の必要な状態にある。

とあるが、以下の点が不明。

1) 「老朽化」の原因

2) 「日常の教育研究活動にも支障をきたす」ようになった原因は、「老朽化」なのか、その他の原因なのか。すなわち、建物に起因するか、大学の組織改編、規模拡大、運営上の問題に起因するか、不明確である。明確にされたい。

3) 「学生の安全確保が難しい」という根拠は何か、示すべき。

### 2. 法人マスタープラン「2 概要」について

(2)吉村順三氏の設計理念を継承、と記されているが、設計理念をどのように認識しているか不明。明確に示してほしい。

### 3. 「緊急整備対策指針」（平成20年3月31日県民生活部）と法人マスタープラン「芸術大学整備マスタープラン」との関係

両者の作成年月日を比べると、法人マスタープランが先に作られ、緊急整備対策指針が後から作られている。緊急整備対策指針は、法人マスタープランを追認するため指針であり、指針の役割を果たしていない。

したがって、指針そのものを再検討すべきである。あるいは、指針に基づかないマスタープランは破棄して、指針に応じたマスタープランを考えるべきである。

#### 4. 「3 法人マスタープランの取り扱い」について

芸大施設整備ビジョンと法人マスタープランはどのような関係なのか。ビジョンと法人マスタープランが合わない場合、ビジョンに沿って、法人マスタープランを変更する予定があるか否か、示してほしい。

## II 資料「ビジョン作成の基本的な考え方」について

### 1. 「愛・知・芸術の森」を構成する5つの要素とキャンパス整備について

#### 1) 機能

現在の建物が、現時点での教育・研究活動に支障をきたしているとした場合、まず、その原因を明確にし、その上で、現在の建物に対する対応を考えるべきである。「不便」ということだけで、建物を取り壊す決定的な理由にはならない。原因を明確にしない限り、例え新たな建物を造ったとしても、また、40年後に同じ問題が生じる。

#### 2) 生活

吉村順三の設計理念を現在のキャンパスから読み取れば、ここに示された「美術と音楽の融合を育むスペース／静穏と活気のメリハリ、快適な環境／貴重な森、緑、広がる景観の継承／学生、先生の対話が弾む憩いの場」は満たされている。むしろ、「継承」しなければ、キャンパスライフは保障されない。

#### 3) 連携

音楽学部棟の新築によって生じた旧校舎の空きスペース、すなわち、旧音楽学部棟を交流拠点として利用すれば、市民がキャンパス内に奥深く入ることは容易になる。これは、今の配置を変えることなく、可能であろう。

#### 4) 国際化

「吉村順三設計の建物を取り壊した」という事実が来訪した外国人芸術家に伝われば、大学の信用は失墜すると考えられる。すなわち、芸術大学といいつながら、著名な建物を壊すという行為は、欧米の芸術家の常識では、考えられないことである。国際化を推進する唯一の道は、現在の建物を再生することである。

#### 5) 環境

サステナブルの基本は、現存するモノを壊さないことである。現存する建物を壊して、新築建物に対してのみ省エネ設計をしても、それは、欺瞞である。現存建物を省エネ、サステナブルの観点から再生すべきである。

以上、5つの要素に従って、忠実に考えた場合、現在の建物を再生することを前提にキャンパスの将来構想を考えるべきである。